

孟浩然

年 組 氏名

中国の盛唐時代（七一〇～七六五年）に活躍した詩人孟浩然是、「春眠曉を覚えず」と歌った「春曉」という詩で有名である。孟浩然是自然派詩人として知られ、同じ自然派詩人の王維、韋應物、柳宗元とともに、「王孟韋柳」と称される。

李白の見た孟浩然

孟浩然に贈る

吾愛す 孟夫子

風流 天下に聞こゆ

紅顔 軒冕を棄て

白首 松雲に臥す

月に酔うて頻りに聖に中り

花に迷うて君に事えず

高山 安んぞ仰ぐべけんや

此より清芬を揖す

李白

私は孟先生が大好きだ。その風雅な人からは天下に知れわたっている。青年のころより官位につく望みをすて、白髪の老年まで、雲のかかる松の木かげで寝起きしておられる。月をながめ酒に酔い、花の美しさに心をうばわれて天子に仕えようとしない。このように世俗をこえた立派な人からは、高い山のようで、どうして仰ぎ見ることができよう。私はただここで、先生の清らかな姿を拝礼するばかりだ。

四〇歳にして長安の都に出、多くの有名詩人と交わった孟浩然是、この時期に李白と知り合ったらしい。

一二歳年下の李白は、すぐれた詩才をもちながら、世間をはなれ、自然の中に深く入って生活を送る孟浩然の人がらにすっかり魅せられた。そのため、この詩も孟浩然をほめちぎっているが、はたして孟浩然という人は、一生を通して地位も名誉も望まない、世俗を超越した人物だったのだろうか。

公務員試験に何度も落ちた

孟浩然是六八九年、湖北省襄陽県の生まれ、名は浩、字は浩然。襄陽は安陸の西二〇〇キロにある景色の美しい農村地帯であり、今でもにわとりや犬の鳴く、のどかな土地であり、「春曉」の舞台ともいわれるところである。

孟浩然是、ここで育つうち、人並みに出世の望みをもつようになり、成人して「科挙」という公務員試験を何度か受けたが、その都度、失敗した。

※科挙……唐代に行われた公務員試験。「いろいろな科に分けて試験を行い人を挙用する」という意味。主要な科に明経と進士とがあり、明経は主に儒学の經典に関する知識を、進士は主に詩文の能力をみた。なかでも進士科は博学多才であることが要求され、試験は非常に難しかった。「三十老明経、五十少進士（三十で明経に合格するのは年寄りの部、五十で進士に合格するのはまだ若いほう）」ということわざが生まれたほどの難しい試験であった。

したがって、李白の詩のなかの、「紅顔、軒冕を棄て」ところは、必ずしもあたっていない。
※軒冕＝貴人の用いる車とかんむり。転じて高位・高官をいう。

正直に述べたばかりに損をした

孟浩然是試験失敗後、各地を放浪した末に郷里の鹿門山という山に世をさけて住んでいた。そして、自然の中で、自然を見つめる目を養いつちかかってきた彼は、四〇歳で長安に出るまでに、自然詩人として世にその名を知られるようになっていた。そのため、都に出ると、有名な詩人、張九齡や王維にその才能を知られるところとなり、李白らとも交わった。

彼は都に出てからも官職につこうと努力した。

ある日、友人の王維を宮中の役所に訪ねたとき、たまたま玄宗皇帝が来あわせ、孟浩然是は拝謁を許され、詩を作るチャンスを得た。

彼はこのとき、喜び勇んだため、あまりにも正直に、しかし、謙虚に、「不才、明主に棄てられ、多病、故人に疎まれる」（「歳暮帰南山」）と歌った。しかし、その詩は、「棄てられた」とは無礼である。」と玄宗皇帝のいかりにふれた。謙そんした表現のうちにこもる不平不満を見ぬかれ、せっかくのチャンスを自ら棒にふった。

晩年まで仕官しがつた

孟浩然是晩年五〇歳近くになって、「洞庭に臨む」という詩を作っているが、それには、官吏として荊州（江陵）に来ていた張九齡に対して、仕官を望むナゾがかけられていた。

それは、詩の一節「済らんと欲するに、舟楫なし」の部分で、直訳は「洞庭湖を渡ろうとしているが、舟もかじもない」であるが、じつは「役人になって世わたりがしたいのであるが、コネ（縁故）がない。」というなげきをもらしたものである。ちなみに、この詩のおかげで、孟浩然是張九齡の下で、補佐役として仕官することができた。

こうしてみると、孟浩然是、晩年まで官位にこだわったのであるから、李白のいうほどに、世間を超越していた人物ではなかったようだ。

自然詩人として

有名な唐代詩人の中でも、自然詩人としては、王維と並び称される孟浩然是であるが、彼が、自然に深く交わり、長い間、世の中からはなれてくらししたのは、そのきままな性格と、自分の才能が社会の中に受け入れられなかったことへの不満の現れではなかったかとの説もある。確かに、四〇歳を過ぎて仕官にあくせくしているところをみると考えられることではある。

しかし、彼の行動がどうあれ、孟浩然是が、唐代詩人中でもきわだった存在であることは確かであり、その作品が、自然を歌い、すがすがしく、美しく、しかも親しみに満ちた内容であることに変わりはない。李白より一歳年下の杜甫もまた孟浩然是を尊敬した一人であった。彼は「解悶（うさばらし）」一二首のその六で、

復た憶う 襄陽の孟浩然

清詩句句 ことごとく伝う
るに堪えたり

また襄陽の孟浩然のことを思い出した。
その清らかな詩の一句一句は、みな伝えられて当然のすばらしさだ。

と歌い、やはり彼の詩のすばらしさをほめたたえている。